

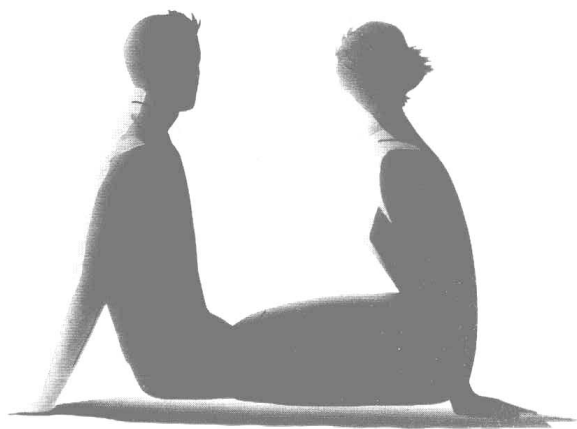
君を
見上げて

山田太一



新潮社

君を見上げて
山田太一



新潮社

きみ みあ
君を見上げて

一九九〇年二月二〇日 印刷
一九九〇年二月二五日 発行

著者 山田太一
やまだ たいいち



発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

〒一六二 東京都新宿区矢来町七一 振替東京四一八〇八
業務部〇三(二六六)五一一・編集部〇三(二六六)五四一一

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 大口製本印刷株式会社

©Taichi Yamada 1990, Printed in Japan

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

価格はカバーに表示してあります。

君を見上げて
* 目次

1	初秋のソウルへ	7
2	ビジネス	16
3	ホテルで	26
4	南大門市場	34
5	夜の靴	41
6	帰国後の気持	63
7	再会	72
8	別のひと	86
9	カルロで	99

17	16	15	14	13	12	11	10
小さな出発	リバー・サイド	二月の出来事	背の高い二人	章二の部屋で	両親の反応	はじめての夜	家族
273	248	203	182	161	149	133	115

装画 * 升たか

君を見上げて

1 初秋のソウルへ

成田でソウル行きのジェット機に乗りこむと、章二の席にすでに若い女が掛けていた。彼女はシートベルトをジーンズの腰にくい込むように締めて窓の外を見ていた。外はよく晴れている。九月の朝である。

搭乗券のシートナンバーを確かめたが、やはり章二の席であった。エコノミーの禁煙席、三人掛けの窓際、翼の上ではないこと。箱崎のエアターミナルでチェックインする時、どうでもいいのだがという口振りではあったが、はつきり希望した席だった。

「いいだろう」と章二はすぐ思った。「長年俺の席だったというわけではないのだし」

それから、女とは一つ空席をへだてた通路側に腰をおろした。女がどの席と間違えているのかは分らなかったが、権利みたいに立たせて代りに座るようなことはしたくなかった。はじめて外国での仕事を頼まれた誇りが章二を寛大にさせていた。

「朝刊でございます」とスチュアーデスが通りすぎて行く。まだ乗ってくる客がいた。自分の席ではないので落着かないが、手持ちのバッグを前の座席の下へつつこみ、一応シートベルトを締

めた。

若い女は、横に座った男など気がつきたくもないというように頑固に背中を向けて動かなかった。ベージュのセーターから、ブラウスの白い襟が見えている。髪はストレートで短い。大学生のような印象。

「いいさ、好きなだけ窓の外を見ればいい」

ずっと気がつかないかもしれないが、そうやって邪魔されずにこっちに背中を向けていられるのは、俺の好意のおかげなのだ。そう思うと、少し若い女の保護者のような気持になった。三十二歳である。まだそんな気持は似合わないが、その朝はがたがたしたくなかった。

「金斗鏞」——ソウル空港にそういう名前の男が迎えに出ていると「金英雄」にいわれていた。キム・ヨウンが、キム・ドゥーヨンが迎えに出ているといったのだ。「彼はね、日本語をまったく不自由なく話すから」とキム・ヨウンはいったが、それでも名前まで日本読みで呼ぶのは失礼だろう。キム・ドゥーヨン。もつとも「斗鏞」を日本読みでどう発音するのか章二は分らない。ともかく名前と挨拶ぐらひは韓国語ですべきだろう。キム・ドゥーヨンさん、アンニョンハシムニカ。

「いいね、慌てて韓国語をおぼえようとしては駄目だよ」とキム・ヨウンはいった。「韓国語を知らないということも、この仕事の条件なのだからね」

ジェット機は離陸した。

若い女と章二の間に、空席を残したままで。それでも女は、窓から目をはなさなかった。

泣いているのだろうか？ 離陸して暫くは分るとして、禁煙のサインが消え、遠くでスチュアーデスが飲み物の注文を聞きはじめてもまだそのままというのは自然ではなかった。きつと涙を隠しているのだ。韓国からの留学生かなにかで、日本に恋人がいて、余儀ない事情で故国へ帰って行く。

「お飲みものは、いかがでしょうか？」

ワゴンを押したスチュアーデスが次第に近くなってくる。十時半だった。早い昼食が出ると聞いている。ビールかワインを少しのほうがいいか？ しかし、十二時にはソウルへ着いてしまう。仕事を前にして酒の匂いをさせるわけにもいかないだろう。本当は緊張をほぐすのに、グラスワインぐらいは丁度いいのだけれど。

「お飲みものは、いかがでしょうか？」

三つ四つ先の席へスチュアーデスが聞いていた。何度も見ても悪いと思っていたので、四、五回目ぐらいの視線を章二は女の方へ短く向けた。

足が長い。膝が前の座席の背についている。大きな女なのだろうか？ いや、たぶん姿勢のせいだろう。

それにしても、女を若いと、どうして自分は決めこんだのだろうか？ たしかに服装は若いが、後姿で年齢は分らない。ページジュのセーターに白のブラウスは五十歳だっておかしくない。もっともジーンズなのだから、四十歳以上ということはないだろうが。

「お待たせいたしました」とスチュアーデスが章二の横でいった。「お飲みものでございます」その声は、女の方に向けられていた。

すると、はじめて女がこつちを向いた。

「コーラ、下さい」

章二が女の顔を見たのは一瞬だった。それ以上は無礼だし、また一瞬で、それ以上長く見たいとも思わなくなっていた。

「オレンジ・ジュース」と章二はいった。

一瞬見た女は、まるで「平凡」とか「現実」とかの実物見本のようなだった。女は、別れがつかなくて泣いてなどいなかったし、特に醜くも美しくもなかった。学生というほど若くもなかったし、四五十というように老けてもいなかった。三十前後という気がした。声もいま聞いたばかりなのに、もう印象が薄れていた。高くも低くもなかった。

ま、こんなものだ。どうも俺は夢想してしまう。恋人と別れた韓国人留学生だと？　そういう甘い匂いは、隣の女にはなかった。

コーラとジュースが二人の前に置かれた。

「あら」と小さく女がいったのは、前方で食事が配りはじめられた頃だった。「私、もしかすると――」

独り言のようないい方が、途中から曖昧に章二に向けられた。

「は？」

「席を間違えていたらいいんです。Hは通路側ですよね？」

文庫本をひらいて、はさんである搭乗券を見せている。

「ええ」と章二は微笑した。「分つてましたけど、窓際がお好きのようだから」

「じゃあ、こちらですか？」

章二の本来の席は自分のいる席か、と人さし指を前後させて、とんでもないことをしたように

いった。

「いいんです。もし、こっちの方がよければ替りますけれど」

「替った方がいいですか？」

「ぼくは、どっちでも」

「このままでいいでしょうか？」

「どうぞ」

「すいません。やっぱり、ソウルを空から見たいし」

「どうぞ、どうぞ」

少し投げやりのような方になった。

大げさにすまなそうな声を出したわりには、たちまち甘えて窓際を動かない。十代とか相当の美人とかいうならまだ許せるけど、その年の並の女ではただ図々しいだけだ。こっちだってソウルを空から見たいんだ。海外旅行は、まだ二度目なのだ、などと章二は思った。

「お仕事ですか？」と女が聞いた。

「ええ。ちよつと頼まれて」

「私は観光なんです。はじめて一人で。団体じゃないの、はじめてなんです」

「いいなあ」

「不安だけど」

「治安はそう悪くないでしょう」

「ハンニチがあるんじゃないですか？」

「ハンニチって——」

「反感。日本人に——」

「ああ——」

それはきつとあるだろうと思ったが、旅行者がすぐ感じるほどのものかどうかは見当がつかなかった。

「ほくも、はじめてだから」

「あ。じゃあ、見たいんじゃないですか？」

「なにを？」

「空から、ソウルを」

「いいですよ」

「替ります。なんとなく、何度も来てる人のような気がしてたんです」

しかし彼女はちよつと立上りかけただけになった。

「ランチでございます」食事が横に来ていた。

「いいんです」と章二はいった。「飛行機で席を替るのは縁起が悪いっていうし」

「そうなんですか？」

「飛行機会社が乗客運営上そういつてるのかもしれないけど」

そのあたりは、スチュアーデスからランチの盆を受けとりながらだったので、スチュアーデスにも聞かれていたという口調になったが、スチュアーデスは忙しくてそんな雑談に反応している暇はない。彼女だけが楽しそうに笑った。

そのわりにあとは話がはずまなかった。

彼女がブランド物の話をはじめたのである。

ソウルでは、ヨーロッパのブランド物の贋物が安く手に入るらしい。ところが日本の税関で贋物は没収されると聞いている。それは、どの程度のきびしさなのだろうか？ というようなことだった。

章二はその話題を嫌悪していた。出掛ける前に母と弟といい合いをしたのである。大体、どこへ行っても誰かが提げてるようなブランド物のバッグを、どうして欲しいと思うのが章二には分らない。ましてや、その贋物など安くたつてなんにもならない。「それが章二の偏屈」と母はいった。「みんなが持っているいいものを自分も欲しいと思うのは人情でしょう。贋物は贋物で面白いじゃない。安く買えれば買ってみようと思うのが普通なの」

「そういう気持が分らないから、嫁さんが来ないんだ」と傍で弟もいった。なんてことをいう弟だ。買って来て、というのを買わないといって出て来たのである。

「そういうことは知らないですよ」

柔らかくいったつもりだが、多少不機嫌が顔に出たかもしれない。「すぐ顔に出ちゃうんだから」というのも、何百遍も聞いた母の文句である。三十を越してすぐ感情が顔に出るのは恥ずべきことだと思っているが、一方でこんな行きずりの会話でまで自分を偽りたくないという気持もあった。

大人気ないと思いながら会話が熱を失って行くのを、そのままにした。とぎれとぎれにソウルの気温のこと、換算率のこと、キムチの種類のことなどを話し、食事が終ると、もうジェット機は高度を下げはじめていた。

「なんだか」と窓の外を見ながら彼女がいった。「街の上は飛ばないみたい」
「いいんです。気にしないで下さい」

あとで思うと、どうしてそのことに、着くまで気がつかなかったのか不思議だった。無意識にせよ、長い間彼女は自分を目立たせない訓練をしていたにちがいない。

飛行機が止り、人々が立上って頭上の荷物をおろしはじめても彼女は立たなかった。

「なにか、のせていますか？」

通路に立った章二が、棚を指して聞くと「いいえ。これだけ」と脇のショルダーバッグを叩いて座ったまま微笑した。

遠くでドアがあいた。人々が動きはじめる。

「行きましようか」

「ええ——」

それから、漸く彼女が立上った。章二は急に感情を殺した。前方の進み具合を見ながら「どうして今まで気がつかなかったのだろう」と動揺を抑えた。

無論それほど大げさないうことではない。この頃女性の背丈はどんどのびているのだから、彼女が百八十センチあろうとそれ以上だろうと感情を殺したりすることではなかった。しかし、完全に意表をつかれたのだ。座っている間、まったく背の高さを感じなかった。いや、一回だけそんなことを感じたが、すぐ忘れていた。

「バスに乗るのかしら？」

章二の背後で彼女がいった。

「いや直接でしょう」

二人の声はあまり何気なさすぎて、かえって人工的な気が章二はした。このまま彼女の背丈に触れないのは子供染みてはいないだろうか？